

現象学と質的研究の方法

ナミン・リー

吉田 聡訳

過去五・六十年の間、多くの研究者が人文・社会科学におけるいわゆる量的研究の方法の困難と限界を見て取り、それらに対処すべく様々な種類の質的研究の方法を發展させてきた。そうした方法の一つが、フッサール、ハイデガー、メルロ・ポンティらの古典的現象学に基づいて展開されてきた質的研究の現象学的方法である。質的研究の現象学的方法にも様々なものがある。そのうちの一つに、心理学、教育、看護など人文・社会科学における様々な分野で広く用いられてきた、体験の現象学的研究がある。

質的研究の現象学的方法は人文・社会科学において広く用いられてきたにも関わらず、研究者の間で、この方法を本当に古典的現象学に基づく現象学的方法と呼べるかどうかという問題に対する合意は得られていない。多くの研究者たちがこの方法を現象学的であると考え、それを用いて多くの研究業績を公表してきた一方、他の研究者たちはその方法が「現象学的」とは呼ばれないと主張してきた。例えば M・クロツティは、フッサール、ハイデガー、メルロ・ポンティの古典的現象学と、質的研究の現象学的方法を採用した新しい現

象学とを区別しつつ、後者は前者と無関係であると主張する。J・ペイリーもまた、質的研究の現象学的方法はフッサールの現象学に基づいていない以上、「現象学的」とは呼べないと主張した。

そこで、本稿で私は質的研究の現象学的方法の問題について論じ、この方法を発展させる多様な可能性があることを示したいと思う。第一節では、最も重要な質的研究の現象学的方法の一つとしての、体験の現象学的方法が持つ基本的な性格の概略を描き出し、それに対するいくつかの批判を紹介する。第二節では、それらの批判に対する批判的評価の論拠を準備するため、現象学的還元の諸形態を分類する。その上で第三・第四節では、諸々の批判を吟味し、体験の現象学的方法の多様な可能性を示す。第五節では、第三・第四節で論じられた範囲を超え出した体験の現象学的方法のさらなる可能性を探る。第六節では、生活世界と発生的現象学の問題に関連した現象学的方法の可能性を示す。

一 体験の現象学的方法とそれに対する諸批判

体験の現象学的方法の諸々の方法は、A・ヴァン・カーン (1966)、A・ジオルジ (1970)、P・コライジイ (1978)、P・ベナー (1984)、M・ヴァン・マーネン (1990)、C・ムスターカス (1994) などによって発展させられてきた。それらの方法は、一、体験のデータを収集する過程、二、データを分析する過程、三、報告書を書く過程から成る。形式的な観点から見れば、体験の現象学的方法は、体験に関する他の研究方法と異なるものではない。

だがこのことは、現象学的方法と他の方法に全く違いがないということの意味しているのではない。現象学的方法の提唱者たちによれば、それらの間には決定的な違いがある。その違いは、現象学的方法

法がフッサール、ハイデガー、メルロ＝ポンティにより発展させられた現象学的方法に基づいているのに対して、他の諸方法はそうではないという点にある。例えば、フッサールによつて発展させられた現象学的還元と形相的還元の方法は、体験の現象学的研究の方法として広く用いられている。上述の研究者たちは、まず体験のデータを収集する過程において、現象学的還元の方法を用いる。この場合の現象学的還元の方法は、データを収集する際に研究者は自らがデータに関して持つていよう諸前提を保留する——あるいはフッサールの言葉でいえば「括弧に入れる」——べきであるということを含意している。このように、現象学的還元の方法は研究者の持つ諸前提によつて汚染された事柄それ自体へと接近するための手段なのである。さらに、何人かの研究者たちはデータを分析する過程において形相的還元の方法を用いる。彼らによれば、体験の現象学的研究の目的は体験の事相的構造ではなく本質的構造を開示することであり、彼らは形相的還元を体験の本質的構造を把握するために用いるのである。

体験の現象学的研究方法によつて多くの研究がなされてきたにも関わらず、この方法にはいくつかの批判が向けられてきた。何人かの学者たちは、体験の現象学的研究方法は、フッサール、ハイデガー、メルロ＝ポンティによつて展開された現象学的方法とは無関係なのであるから、「現象学的」と呼ばれるべきではないと主張する。

彼らは体験の研究方法としての現象学的還元はフッサール現象学における現象学的還元と同じものではないと主張する。J・ペイリー(1997)によれば、フッサールにおける現象学的還元は哲学的方法であり、哲学としての超越論的現象学の方法であるが、体験の研究方法として用いられている現象学的還元は哲学的方法では全くない。この事実を強調しつつ、彼は次のように主張する。

社会学者は、たとえ人文学あるいは現象学への共感を持つている者であっても、研究技術としてエポケーを用いるよう主張することはできない。なぜなら還元の遂行は直ちにその遂行者を社会的世界から連れ去るからである。[J. Paley (1997), 188]

さらにペイリーは、体験の研究方法として用いられる形相的還元の方法はフッサールの形相的還元の方法とは異なっていると主張する。それらは次の二つの点で異なっている。一、フッサール現象学においては、本質は普遍的なものを意味し、本質を把握する方法としての形相的還元の方法は想像あるいは自由変更の過程を含んでいる。想像の過程を含む方法として、形相的還元の方法は普遍的なものを「直観する」作業なのであり、そこには「推理の過程はなく、推論と同種の活動性もなす」[J. Paley (1997), 191]。フッサールにおける形相的還元とは異なり、体験の研究方法としての本質直観は、「他の人々からのデータの収集を含み、また何らかの推論を必要とする経験的活動」[J. Paley (1997), 191]である。このことは、体験の研究方法としての形相的還元によって、普遍的なものとしての体験の本質を把握することはできないであろうということを含意している。二、フッサール現象学において形相的還元は、一般に現象学的還元がそうであるように、私の独我論的領域において、私によって遂行される独我論的過程であり、それは他の人々への間主観的な関係を持たない。だが、それに対して体験の研究方法としての形相的還元は、独我論的ではなく、間主観的に遂行される方法である。これが、ペイリーが体験の研究方法としての形相的還元を「形相的還元のアンチテーゼ」[J. Paley (1997), 191]と呼ぶ理由である。

二 諸々の現象学的還元

こうした体験の現象学的研究方法に対する諸批判への批判的評価を行うための根拠を準備するために、様々な種類の現象学的還元について論じておきたい。よく知られているように、フッサール現象学の主題は志向性である。フッサールは二つの異なる立場から志向性について探究しようと試み、それによって二つの異なる現象学、すなわち現象学的心理学と超越論的現象学とを發展させた。

現象学的心理学が様々な志向性の本質的構造を明らかにしようとするのに対して、超越論的現象学は世界と世界内的な諸対象を構成する様々な志向性の構成的機能の本質的構造を明らかにすることを目指す。我々は、現象学的心理学を展開するためには現象学的心理学的還元を行わねばならず、また超越論的現象学を展開するためには超越論的現象学的還元を行わねばならない。現象学的心理学と超越論的現象学はどちらも形相的な学であり、これら二種の現象学を展開するためには形相的還元が必要である。このように、現象学的心理学的還元、超越論的現象学的還元、形相的還元は、我々がフッサールの現象学において非常に頻繁に出会う還元である。

私の見解では、フッサールによって展開された現象学的還元は、フッサール現象学それ自体において論じられるよりもさらに細かく分類されるべきである。この種の詳細な分類は、質的研究の現象学的方法の議論にとって非常に重要である。そこで私は現象学的還元の方法を、事実的現象学的心理学的還元、形相的現象学的心理学的還元、事実的超越論的現象学的還元、形相的超越論的現象学的還元、形相的還元の五つに分類する。

(一) 現象学的心理学的還元は、現象学的心理学の事象それ自体としての志向性を経験することを可能にす

る。科学技術時代の日常生活において、我々は自然科学的な思考方法に慣れており、あらゆるものは自然科学的な因果性との関連のうちで存在しているという堅固な信念を持つている。我々は自然科学的世界を超え出るかもしれないようなものは何もないという信念を持つている。そのため、我々は自然科学的世界の構成要素ではないような志向性があるとは考えない。志向性を経験することができるためには、我々はあらゆるものが自然科学的な因果性との関連においてあるという堅固な信念から自由にならねばならない。そして、そうした堅固な信念から自由になるためには、その信念を保留しなければならない。そうした信念を保留し、志向性を経験するという過程は、現象学的心理学的還元である。現象学的心理学的還元の方法によって開示される志向性は事実としての志向性であり、本質としてのそれではない。例えば、私がこと今において持つているのは知覚であり、あそこで昨日持ったのは記憶である。我々に事実としての志向性を経験することを可能にする現象学的心理学的還元は、特に事後的「現象学的心理学的還元」と名付けられるであろう。

(二) 形相的な学としてフッサールによって展開された現象学的心理学の目的は、様々な種類の志向性の事実にある構造ではなく、本質的な構造を把握することにある。志向性の本質的構造を把握するためには、事実としての志向性に関して形相的還元を遂行しなければならない。形相的還元については後ほど論じることにするが、この形相的還元によって事実としての志向性は本質に変化する。事後的「現象学的心理学的還元」と形相的還元の全過程は、現象学的心理学的還元とも呼ばれる。これがフッサールが現象学的心理学的還元について語る際に念頭に置いていたものである。本稿ではそれを形相的「現象学的心理学的還元」と名付け、すでに論じられた事後的「現象学的心理学的還元」から区別する。

(三) 超越論的現象学は世界と世界内的な対象とを構成する志向性の構成的機能を明確にしようとする。超越論的機能の担い手としての主観は、超越論的主観性と呼ばれる。超越論的現象学の目的は、超越論的主観性

が世界の基盤であり、世界は超越論的主観性の構成的産物であるということを示すことにある。自然的態度やその一種としての現象学的心理学的態度においては、我々は、世界があらゆる實在物の総体であり主観性はその世界の一部にすぎないという堅固な信念を持っているため、世界の構成的基盤としての超越論的主観性を経験することはできない。フッサールはこの信念を「自然的態度の一般定立」[E. Husserl (1982), 56]と呼ぶ。超越論的主観性を世界の構成的基盤として把握するため、そして同時に世界を超越論的主観性の構成的産物として把握するためには、我々は自然的態度の一般定立を保留しなければならぬ。自然的態度の一般定立を保留し、超越論的主観性を世界の構成的地盤として経験するための方法的な手段とは、超越論的現象学的還元である。差し当たり超越論的還元の方法によって開示された超越論的主観性は、超越論的事実としての私自身の超越論的主観性である。超越論的事実としての私の超越論的主観性を経験し、事実的世界を私の超越論的主観性によって構成されたものとして経験することを可能にする超越論的現象学的還元は、事実的―超越論的現象学的還元と名付けられるだろう。

(四) 超越論的主観性の事実的構造ではなく、本質的構造を把握することもまた、形相的な学としてのフッサールの超越論的現象学の目的である。超越論的主観性の本質的構造を把握するためには、超越論的事実としての事実的超越論的主観性に関する形相的還元を遂行しなければならない。形相的還元によって、超越論的事実としての超越論的主観性は本質へと変化する。事実的―超越論的現象学的還元と形相的還元の全過程は、超越論的現象学的還元と呼ばれる。フッサールが超越論的現象学的還元について語る際に念頭に置いていたのはこのことである。本稿では、その還元を形相的―超越論的現象学的還元と名付け、すでに論じられた事実的―超越論的現象学的還元から区別する。

(五) 形相的還元は、物質的なものであれ心的なものであれ、あるいは現象学的―心理学的なものであれ超

越論的・現象学的なものであれ、何らかのものの本質を把握することを可能にする方法である。形相的還元を持つ意味を理解するためには、我々はフッサール現象学における本質とは何かということを理解しなければならない。本質とは、我々に個別的なものの集団を共通の名前で呼ぶことを可能にする普遍的なものである。ここで共通の名前で呼ばれるであろう個別的なものの集団は、事実として今存在するもののみではなく、過去において存在したものと未来において存在するであろうもの、さらにはただ想像されるのみであるような諸々のものをも含んでいる。例えば、限りなく多く存在する人間たちを我々は全て人間と呼ぶ。この場合、人間の本質は「人間性」という普遍的なものである。なぜなら、人間性はまさに全ての人間を人間と呼ぶことを可能にする要素だからである。

形相的還元は様々な種類の本質を把握する過程である。本質を普遍的なものとして把握するためには、我々は問われている本質のもとに包括されるであろう個別的なものを経験しなければならない。この場合、個別的なものとは実在的世界において存在するものである必要はなく、単に想像されたものでもありうる。個別的なものとは本質を把握するための出発点の役割を果たす。個別的なものを経験に基づいて自由に想像することによって、我々は本質のもとに包括されるであろう事物のあらゆる可能的変様体を作り出し、それらの変様体全てに共通の普遍的なものを把握しなければならない。そのためフッサールは『経験と判断』で、形相的還元の一つの重要な段階として「一、変更の多様性を生産しつつ通覧すること、二、連続的な一致における統一的な結合、三、諸々の相違に対して合同であるものを見出す能動的同一化」[E. Husserl (1973), 346-347]を挙げている。この形相的還元は人間の本質を把握するためにのみではなく、あらゆるものの本質を把握するためにも用いられうる。

注意されるべきなのは、現象学的還元の種類の数だけ体験についての現象学的研究の種類も存在するという

ことである。現象学的還元が形相的還元を除いて四種類存在するのに対応して、体験の現象学的研究もまた四種類——体験の (i) 事象的—現象学的心理学的研究、(ii) 形相的—現象学的心理学的研究、(iii) 事象的—超越論的現象学的研究、(iv) 形相的—超越論的現象学的研究——存在しうるのである。もつとも、形相的還元に対応する体験の現象学的研究の独立した分野はない。なぜなら、それによってなされる事柄の内容を見れば分かるように、形相的還元は中立的であるため、あらゆる種類の問題に適用されるからである。こうした現象学的還元の分類は、本稿で質的研究の現象学的方法の問題を議論するための指針を与えてくれるであろう。

三 事象的—現象学的心理学的還元の問題に関する諸批判に対する批判的評価

我々は様々な種類の現象学的還元を区別することによって、体験の現象学的研究に対する諸批判を吟味することができる。この節では、ペイリーの批判——体験の現象学的研究に用いられた現象学的還元は、超越論的現象学的方法としての超越論的現象学的還元ではなく、フッサールの意味で現象学的とは呼ばれない、という批判——を吟味する。

体験の現象学的研究は超越論的現象学的還元の方法を用いておらず、フッサールの意味で現象学的とは呼ばれない、というペイリーの主張は、誤った前提——フッサールにおける現象学的還元や現象学は一種類のみである、すなわち超越論的現象学的還元や超越論的現象学のみである、という前提——に基づいている。さらにフッサールの現象学的還元が超越論的現象学的還元に尽きるのであれば、超越論的現象学的還元は超越論的現象学の方法であるし、またそれは自然的態度の一般定立に基づいて遂行される経験的科学研究には用いられないため、ペイリーの批判は全く正しい。もし我々が超越論的現象学的還元を事象的—現象学的心理学

的研究へ応用しようとするならば、この場合我々はいわゆる「他の類への移行」^{メタパン} [E. Husserl (1950), 39] の誤りをおかすことになるため、我々の試みは完全に非現象学的なものとなるだろう。

ペイリーが体験の現象学的研究を一種の経験科学的研究と呼んでいることに注意しなければならない。ペイリーの主張は、フッサール現象学は哲学的現象学の範囲に限定されているため、そこに経験科学的研究の余地はありえない、というものである。ペイリーの主張とは逆に、フッサール現象学には経験科学的研究の余地があり、もちろん、上述の事実に現象学的心理学の余地もある。そこで、事実に現象学的心理学が統一的全体としてのフッサール現象学の構成要素であることを示すために、現象学的心理学の還元の問題を再び扱うことにする。

上述のように、現象学的心理学の還元は、形相的学問としての現象学的心理学を基礎付ける方法である。そうしたものとして、現象学的心理学の還元は二つの段階——事実に志向性の経験を可能にする事実に現象学的心理学の還元と、志向性の本質の把握を可能にする形相的還元——を含む。フッサールは哲学者として、形相的学問としての現象学的心理学の基礎付けに関心を持っていた。それゆえに、事実に現象学的心理学の還元によって明らかにされる事実に志向性に特別な注意は払わず、むしろ志向性の本質的構造の解明の試みに直接向かったのである。

このことから、事実に現象学的心理学の還元によって明らかにされる事実に志向性は全く現象学の主題ではないという印象が生じるかもしれない。だが、事実に現象学的心理学の還元の方法によって明らかにされる事実に志向性は、経験的「現象学」としての経験的心理学の主題である。事実、『論理学研究』の一節においてフッサールは、現象学的心理学を経験的心理学へと発展させる可能性を認めている。第五研究の第十六節において彼は次のように述べる。

今度は心理学的―経験的科学的見方から現象学的―理念的学問の見方へと移ろう。ここでは我々はあらゆる経験科学的な統覚や現実存在の定立を排除し、内的に経験されたもの、あるいは内的に直観されたもの（例えば全くの想像において）を純粋な体験として捉えねばならない……。[E. Husserl (1970), 577]

この一節が示すように、形相的学問としての現象学的心理学へと移る前に、我々はさらに「心理学的―経験的科学的態度」――事実的―現象学的心理学的還元によって可能となり、また事実的志向性の様々な構造の解明を試みる態度――をとりうる。このようにして我々は、様々な事実的現象学的心理学を発展させうるのである。

フッサールによれば、事実的―現象学的心理学は彼の現象学において確かな位置を占める分野である。これに関連して、次のことが注意されねばならない――フッサールは、体系的統一としての自らの現象学が、(i) 静態的現象学と発生的現象学とに区分される超越論的現象学、(ii) 形式的存在論と領域的な存在論とを含む現象学的存在論、(iii) 超越論的現象学と現象学的存在論とに基づく様々な経験的科學、を含むものと考えていたのである。フッサールは超越論的現象学と存在論的現象学とに基づく経験的科學を「経験的現象学」[E. Husserl (2002), 483]と呼ぶ。経験的現象学の概念とそれが現象学の体系的統一において占める位置について、フッサールは次のように述べている。

純粹で合理的な学は、事実的世界やそれに関する学から独立している。だが後者の学は、前者の学の合理的根拠に基づいてのみ絶対的な学として可能である。我々が、普遍的現象学の合理的根拠に基づいて絶対的合理性へともたらされ、現象学的に評価される学を特殊現象学と呼ぶならば、普遍的合理的現象学と經

驗的現象学とは共に哲学と一致するのである。[E. Husserl (2002), 482-483]

この一節が示すように、フッサールは普遍的現象学の合理的根拠に基づいて絶対的合理性へもたらされる経験的な学を「経験的現象学」と呼んでいる。様々な経験的事実があり、それらに対応する経験的現象学的研究の様々な分野がありうる。上述の事実に「現象学的心理学は経験的現象学の一つであり、また体験の現象学的研究は事実的「現象学的心理学の一種である。このように体験の事実的「現象学的心理学の研究は、フッサール現象学の統一的体系のうちに位置付けられ、正当に現象学的と呼ばれうるのである。

四 形相的還元の問題に関する諸批判の批判的評価

形相的還元の問題に関する体験の現象学的研究方法に対する批判が部分的に妥当なものであることは事実である。幾人かの批判者たちが主張するように、体験の現象学的研究を遂行する多くの研究者たちは、本質や形相的還元といった概念をそれらの真の意味を理解せずに用いている。時にはこれらの概念は非常に不明確な用いられ方をしている。ある研究者たちは体験の事実的構造を説明しているにもかかわらず、その本質的構造を説明していると信じていたりする。この場合、体験の現象学的研究において用いられる本質や形相的還元といった概念はフッサール現象学におけるそれとは全く異なる、と主張する批判者たちは正しい。

しかし、本質や形相的還元といった概念をフッサール現象学における用いられ方と同様に用いる研究者たちも存在する。典型的な例は、体験の現象学的研究方法を教育学において発展させたヴァン・マーネンであろう。次の一節は、彼が本質や形相的還元といった概念をフッサールと同様の仕方を用いていることを明確に示して

いる。

主題の普遍的あるいは本質的な性質を決定する際に我々の関心は、現象をそのものたらしめ、またそれな
 しでは現象がそのものではありえないような諸位相や諸性質を見出す。この目的のために現象学者たちは、
 テーマが現象に（付随的ではなく）本質的に属することを実証すべく、自由な想像変更の方法を用い
 る。自由な想像変更の過程は他の本質的な諸テーマの生成のためにも用いられうる。[M. van Manen (1990),
 107]

体験の現象学的研究方法を心理学において発展させたジオルジもまた、本質や形相的還元といった概念を
 フッサール現象学と同様の仕方を用いている。彼の編著書『現象学と心理学的研究』を参照してみよう。こ
 の著書の第一章「心理学的現象学的方法の概略」において彼は、体験の現象学的心理学的研究の基本的過程
 を概説している。彼によれば、それは四段階から成る。第三段階である「探究される現象に重点を置いた、主
 体の日常的表現から心理学的言語への変形」[A. Giorgi (1985), 18] に関して彼はまず、「素朴な主体による
 記述はあいまいな仕方でも種多様な諸実在を表現するものであるから、これらの変形は必要である。そして
 我々は、その出来事の理解にとって適切な深さにおいて心理学的な諸位相を解明することを欲するのである」
 [A. Giorgi (1985), 17-18] と主張し、「我々は省察と想像変更によつてそれを行う」[A. Giorgi (1985), 18] と付
 言する。ここで彼は、体験の本質を把握する過程における想像変更の役割を強調している。後ほど第三段階
 の解明において、彼は再び体験の本質を把握する過程における「省察と想像変更」[A. Giorgi (1985), 18] の役
 割を強調する。「省察と想像変更」を含むジオルジの現象学的心理学において本質的構造が把握される過程は、

フッサールにおける形相的直観の過程と同様である。それに対応して、彼の本質概念はフッサール現象学で用いられているものと同様である。これに関連して、次のことが注目されねばならない。現象学的心理学的研究の第四段階の解明に際し、彼は次のように述べている。

こうした研究がただ一人の主観によって行われることはほとんどないということが第一に注意されるべきである。ただ一つの事例によって本質的な一般構造を記述することは非常に困難なので、このことを理解することは重要である。より多くの主観がいれば変更の幅はより大きくなり、またそれゆえに本質的なものを看取する能力もまた向上するのである。[A. Giorgi (1985), 19]

ジオルジにおける本質や形相的還元といった概念は、フッサール現象学において用いられるそのようには明確ではないということが付言されねばならない。このことは、体験の現象学的研究において用いられる本質や形相的還元といった概念はフッサール現象学におけるそれと無関係である、とペイリーをはじめとする批判者たちが主張する一因であるかもしれない。そうした批判を免れるために、ジオルジは本質や形相的還元といった概念をより明確にすべきであった。言うまでもなく、フッサール現象学はそれらの概念の明確化に大いに役立つであろう。

体験の現象学的研究における本質や形相的還元といった概念はフッサール現象学におけるそれとは全く異なる、というペイリーの主張には他の理由もある。それは彼がフッサールにおける形相的還元概念を理解していないためである。フッサールにおける形相的還元概念についての彼の理解には重大な問題点がある。上述のように、ペイリーはフッサールの形相的還元には「推理の過程はなく、推論と同種の活動性もない」と述

べているが、体験の現象学的研究における形相的還元過程は一種の推論を含むのである。彼の主張に反して、フッサールにおける形相的還元は自由変更の過程や総合的活動性を含むものであり、この過程は確かに「理性と同種の属性」を有し、推論と呼ばれうる。形相的還元の中に含まれる推論は帰納的推論にきわめて類似したものである。さらに、上述のようにペイリーは、フッサールにおける形相的還元は他者への間主観的関係を有しない独我論的過程であると主張しているが、体験の現象学的研究における形相的還元過程は間主観的な過程である。彼の主張に反して、フッサールの形相的還元は現象学者たちの研究共同体において間主観的に遂行される間主観的過程である。この点で、フッサールにおける形相的還元と体験の現象学的研究におけるそれとの間には全く相違がない。

様々な体験の本質的構造を明らかにすることが体験の現象学的研究の最も重要な課題の一つであるということとは強調されねばならない。この観点から我々は、一般性の程度に応じた様々な種類の本質があるという事実に注意しなければならない。例えば、通りのマツの木の知覚を持ち、その知覚に基づいて自由変更を行うと仮定しよう。この場合我々は、「マツの木」、「木」、「植物」、「生物」等、一般性の程度に応じて互いに区別される様々な種類の本質を把握しよう。同様に我々は、草原の羊から始まる自由変更を伴う形相的還元を行うならば、「羊」、「哺乳動物」、「動物」、「生物」等、様々な種類の本質を把握しよう。

一般性の程度に応じて互いに区別される様々な種類の本質は、外的知覚の対象に関してのみならず、体験に関しても把握されうる。これに関連して、フッサールは「異なるレベルの一般性における体験の理念的種」[E. Husserl (1970), 577] に言及している。例えば、体験としての精神的状態は正常と異常とに区別されることができ、後者は、抑鬱、恐怖症、統合失調症、倒錯等、様々な異常な精神状態に区分されうる。繰り返すと、それらのいずれも様々な種類に区分されうる。例えば、抑鬱は様々な種類の抑鬱に区分されうる。このため、

我々が、ある人がある瞬間に持つ抑鬱を始点とする自由変更に基づいて形相的還元を遂行するならば、「あるタイプの抑鬱」、「抑鬱」、「異常な精神的状態」、「精神的状態」などといった様々な種類の精神的状態の本質を獲得するであろう。

様々な体験の本質を明らかにすることは、体験の現象学的研究の重要な課題の一つである。様々な体験の解明を通して、我々は形相的現象学的心理学の一種としての、体験の現象学的研究を發展させることができるだろう。体験の現象学的探究は、それが独自の価値を持つゆえに、形相的現象学的心理学の一種として展開されねばならない。さらにそれは、事実に現象学的心理学の一種としての体験の現象学的研究の發展にとつて大変な重要性を持つ。なぜならそれは事実に現象学的心理学のいわゆる領域存在論的な基盤であるからである。この文脈において、体験の現象学的研究を通して明らかになる様々な種類の本質は、事実に現象学的心理学の一種としての体験の現象学的研究の基礎となる概念に他ならないことが注意されねばならない。

様々な体験の本質を把握するという課題は、事実的分野としての体験の現象学的研究と、形相的哲学的分野としてのそれとの協働によって成就される。その際、事実に現象学的研究は、様々な種類の体験を収集し、それらをデータとして形相的現象学的研究の自由変更に對して供給しうる。まず第一に、本質の下位の階層に置かれた体験の具体的本質を把握するために、形相的現象学的研究は必然的に体験の經驗的現象学的研究の助けを必要とする。

体験の形相的現象学的研究は、事実に現象学的研究が具体的に遂行され、体験の具体的構造が明らかにされた後に始められねばならない。体験の具体的構造は、自由変更に對して役立つ。よく知られているように、フッサールは、自由変更に對する始点となりうる個別的なものは想像的なものであるかもしれないと主張している。それは実在的なものである必要はない。可能世界に存在するものとしての本質は実在的世界へ必然的に

制限されるものではないから、もちろんフツサールの主張は全く妥当である。だがその一方で、体験の本質を把握しうるためには、我々が日常生活において実際に持つ体験の自由変更を行った方がよい。なぜなら、実際に持ったことのない体験の本質を把握するのは困難だからである。体験に関しては、自由変更の始点としての実際の体験を用いて本質を把握することが望ましい。このことは、ジオルジによって呈示された現象学的心理学の方法に反映している。彼の現象学的心理学は、経験的現象学的還元という方法によって体験の事象的構造を説明することから始まり、最終的に形相的還元の方法によって体験の本質的構造を見出すのである。

五 体験の現象学的研究に開かれている様々な可能性

体験の本質の説明は、体験の現象学的研究の最も重要な課題の一つである。そうした説明の重要性にも関わらず、体験の現象学的研究の課題は体験の本質の説明に限定されるものではないということが強調されねばならない。だが、体験の現象学的研究の課題は、体験の本質の説明に尽きると主張する学者たちもいる。例えば、体験の現象学的研究の発展に重要な役割を果たしたヴァン・マーンは、「現象学は経験的な分析的科学ではない」[M. van Manen (1990), 21]と指摘し、現象学は「出来事の実際の状態を記述するものではない。言い換えれば、それは誰が、何を、いつ、いくつ、どの程度、どのような条件下でなしたのか、等を問うような経験的事実の科学や科学的一般化を行うものではない」[M. van Manen (1990), 22]と主張する。彼によれば、体験の本質的で非事象的な構造を説明することこそが、体験の現象学的研究の課題である。

言うまでもなく、体験の現象学的研究の範囲を形相的研究に限定することは正しくない。上述のように、体験の現象学的研究は形相的研究のみならず事象的・現象学的心理学的研究をも含んでいる。また実践的観点か

らは、事實的・現象学的心理学的研究は、形相的―現象学的心理学的研究より重要なものでありうる。日常生活において我々が遭遇する様々な問題を解決することは学問の最も重要な目的であるが、そうした諸問題に直接取り組み解決しようとするのは事實的―現象学的心理学のような経験的学問であつて、形相的学問ではない。体験に関する具体的な諸問題を解決しようするために、我々はある人やある集団の体験の事實的―現象学的研究を必要とする。この文脈では、医者が治療しようとするのは人間の本质ではなく、今ここに生きる具体的な人間であることが注意されるべきである。

体験の現象学的研究は、形相的研究へと限定されるものではない。私の見解では、哲学以外の様々な経験的領域の専門家たちによつて遂行された体験の現象学的研究のほとんどは、体験の本質的構造を把握しようとはせず、その事實的構造を把握しようとしている。体験の現象学的研究の範囲はどの学者が考えたよりもはるかに広いものである。このような観点から、以下の三つの点について述べたい。

一・我々はすでに、体験の事實的―現象学的心理学的研究とその形相的―現象学的心理学的研究との相違について論じた。それらとは別に、体験の現象学的研究を發展させるための他の方法も考えられる。この文脈では、上述の二種の体験の現象学的心理学的研究が互いに異なつているとしても、それらはいずれも結局のところ自然的態度において遂行されているということが注意されるべきである。自然的態度は我々がとりうる唯一の態度ではない。周知のように我々は、自然的態度から立ち去り、超越論的現象学的還元の遂行によつて超越論的態度をとることも可能である。我々は、超越論的現象学的態度においてもなお体験の現象学的研究を遂行しよう。この体験の超越論的現象学的研究の目的は、体験の構成的機能の構造を解明することである。こうした研究は、体験の超越論的現象学的研究と呼ばれうる。

何人かの研究者たちは、体験の超越論的現象学的研究の遂行が可能であると考えている。M・クロッティ(1996)がその例である。クロッティは、自身が呈示する体験の現象学的研究の前提条件に関して、「現象学において自然的態度は乗り越えられている」[M. Crotty (1996), 15]と主張する。この一節に示されているように、クロッティは、体験の現象学的研究を遂行しうするためには超越論的現象学的還元が遂行されねばならないと考えている。クレスウエルもまた、著書『質的探究と研究デザイン』において、「質的探究の五つの伝統」の一つとしての「現象学的研究」[J. W. Creswell (1998), 51E]を導入する際、体験の超越論的現象学的研究を念頭に置いていると考えられる。クレスウエルは「伝記が一個人の生を報告するものであるのに対して、現象学的研究は複数の個人たちにとっての概念あるいは現象についての体験の意味を記述するものである」[J. W. Creswell (1998), 51]と主張する。その後、現象学的研究の基本的特徴であるエポケーについて説明しつつ、彼は次のように述べる。

前提を持たない哲学。現象学的アプローチとは、実在的なものに関するあらゆる判断——自然的態度——を、それらがより確実な基盤の上に基礎付けられるまで保留するということである。こうした保留はフッサールによってエポケーと呼ばれている。[J. W. Creswell (1998), 52]

この一節で「自然的態度」の保留について言及していることから分かるように、クレスウエルが超越論的現象学的研究を念頭に置いており、現象学的研究を「質的探究の五つの伝統」のうちの一つとして扱っていることは明らかである。

体験の超越論的現象学的研究は二種類に、すなわち事実的・超越論的研究と形相的・超越論的現象学的研究

とに区分されうる。前者は体験の構成的機能の事実的構造を説明することを目的とし、後者はそうした機能の本質的構造の解明を目的としている。

クロツティやクレスウェルらによつて呈示された体験の現象学的研究は、形相的「超越論的現象学的研究のカテゴリリー」に属するように思われる。彼らは、体験の現象学的研究の目的は、「現象の本質——すなわち、現象としての現象における、現象をまさにそれたらしめるような要素あるいは諸要素——を決定すること」[M. Crotty (1996), 159] や「体験の本質的な不変の構造（または本質）、あるいは体験の中心的で根底的な意味を求めらるゝ」と [J. W. Creswell (1998), 52] とあると主張する。

私の知る限り、これまで体験の事実的「超越論的現象学」を發展させる試みは見られなかった。だが、それでもなお体験の事実的「超越論的現象学」を發展させることは可能である。体験の事実的「超越論的現象学」の課題とは、単一の超越論的事実としての体験の構造を説明することである。我々はこの体験の事実的「超越論的現象学」を發展させるための手掛かりをフッサールのうちに見出しうる。『イデーニー』の一節でフッサールは次のように述べている。

これらの非実在的なものを研究するのが現象学なのであるが、その際に非実在的なものを単独の個別的なものとしてではなく、その「本質」において研究するのである。しかしながら、どの程度まで単独の諸事実としての超越論的諸現象へと接近しうるのかということや、そうした事実研究が形而上学の理念に対してどのような関係を持つのであろうかということについては、一連の諸探究の結論において初めて考察されうるのである。 [E. Husserl (1982), XXI]

この一節が示すように、フッサールは「単独の諸事実としての超越論的諸現象」を形而上学の理念に関連付けており、それを体験の事実的「超越論的現象学の主題として扱う可能性に言及していない。言うまでもなく、「単独の諸事実としての超越論的諸現象」は体験の事実的「超越論的現象学の主題である。

二、我々が議論を体験の事実的「現象学的研究へと拡げるならば、体験の現象学的研究の範囲は通常考えられているよりもはるかに広いことが明らかになる。例えばそれは、事例研究や民族誌学の形態をとりうる。ある人の体験の事例研究を事実的「現象学的還元に基づいて遂行することは可能である。現象学的事例研究は体験の事実的「現象学的研究の最も単純な形態である。さらには、集団が持つ体験の民族誌学的研究も可能である。体験の民族誌学的研究は、事例研究に基づいてなされるか、そうした事例研究なしに行われるかのいずれかである。それに反してヴァン・マーンは、体験の現象学的研究は事例研究や民族誌学の形態をとりえないと主張する。³

ヴァン・マーンが体験の現象学的研究は事例研究や民族誌学の形態をとりえないと主張する理由は何であろうか。それは彼が、体験の現象学的研究は形相的研究と同様のものであるという前提を有しているからである。だが彼の考えに反して、体験の現象学的研究は様々な形態をとりうるものであり、また上述のように、形相的「現象学的心理学的研究はその一形態にすぎないのである。

我々は、体験の現象学的研究の様々な可能性に関して、現象学的研究と非現象学的研究との関連を再考しつつ、幾人かの研究者たちによって呈示された体験の質的研究の分類方法が真に妥当なものであるかを吟味しなければならぬ。体験の質的研究の分類についてはいくつかの案がある。当然ながら、こうした体験の質的研究の分類に関する研究者たちの見解は一致せず、その方法は研究者によって異なっている。例えばヴァン・

マーネンは、体験の質的研究を事例研究、民族誌学、現象学に分類する [M. van Manen (1990), 22]。またクレスウェルは、それを伝記、現象学的研究、グラウンデッド・セオリー研究、民族誌学、事例研究に分類している [J. W. Creswell (1998)]。

この彼らが提案した質的研究の分類には疑問の余地が残る。注意されるべきなのは、体験の現象学的研究は上述の他の研究方法と競合関係にあるのではないということである。すでに論じられたように、体験の現象学的研究は事例研究あるいは民族誌学、さらには伝記あるいはグラウンデッド・セオリー研究という形で遂行されうるものである。もちろん、伝記、事例研究、民族誌学、グラウンデッド・セオリー研究は現象学的方法とは関係のないいくつかの方法によって——例えば量的研究によって——遂行されるであろう。この場合、それらは現象学的研究とは呼ばれない。それに対して、それらの研究が現象学的方法の助けによって遂行されるのであれば、それらは正当に現象学的であると見なされる。それらは様々に異なった類型において遂行される体験の現象学的心理学的研究を体現しているのである。

三、もし議論を事実的現象学的心理学的研究に制限するならば、それらのほとんどはいわゆる解釈学的方法を現象学的方法にとつて必要な構成要素として要求するということが明らかになる。この点に関して、体験は二つの種類——すなわち研究者が直接に自己反省を通して把握しうる体験と、自己反省を通して直接には把握されえないであろう体験——に分けられるということが注意されるべきである。第二の種類の体験の例としては、研究者が直接には把握できない他者の体験や、遠く隔たった過去の地平に沈んでいるために本人にとつても反省によつて直接的に把握することができない研究者自身のかつての体験が挙げられる。方法的な観点から見れば、第一の種類の体験は研究者によつて直接的に自己反省という方法によって把握されるので、我々

はそれらの体験を捉えるためには解釈学的方法を必要としない。それに対して、第二の種類の体験は、直接的に自己反省によって把握されうるものではなく、解釈によって間接的にのみ把握されうるものであり、解釈学的方法によってのみ捉えられうる。この場合、解釈学的方法は現象学的方法にとつて無くしてはならぬ構成要素であり、体験の現象学的研究は解釈学的研究という形をとることになるのである。実際に、何人かの研究者たちは、我々が体験の現象学的研究を遂行するためには解釈学的方法を必要とすると指摘している。

この点に関して、フッサールの超越論的現象学とハイデガールの解釈学的現象学との間には明確な区別があると主張する学者たちもいる。彼らによれば、フッサールの超越論的現象学は解釈学的現象学ではありえない。さらに彼らは、ハイデガールの解釈学的現象学に基づいた体験の現象学的研究は解釈学的と呼ばれうるが、フッサールの現象学に基づいた研究は解釈学的とは呼ばれえないと主張する。しかしながら、この主張は妥当ではない。なぜなら、フッサール現象学が解釈学と関係を持たないということは事実ではないからである。フッサールの著作を詳しく見てみると、彼が解釈学の問題に取り組んでいることが分かるであろう。例えば、一九二八年の『形式論理学と超越論的論理学』において彼は超越論的現象学を「超越論的主観性の自己解釈」[E. Husserl (1974), 280] と定義している。また一九三二年の講義では、彼は現象学と解釈学との関係について、「意識の真正な分析とは意識生の解釈学である」[E. Husserl (1941), 12] と主張している。私が他の機会 [N.J. Lee (2004)] で論じたように、フッサールの発生的現象学は解釈学的要素を持つており、それとハイデガールの解釈学的現象学との間には類似性がある。それゆえに、フッサール現象学に基づく体験の現象学的研究とハイデガールの現象学に基づくそれとの間に根本的な相違があると主張し、後者のみを体験の解釈学的現象学的研究と呼ぶのは妥当ではないのである。

六 現象学的質的研究のさらなる可能性

現象学的質的研究には、以上の議論の範囲を超えたさらなる可能性がある。この点に関して、次の二点を述べておきたい。

(一) 現象学における事象それ自体としての志向性についての議論は、志向的体験に関わるのみではなく、志向の対象にも関わっている。さらに、志向的对象に関する議論は対象の普遍的な地平としての生活世界に関する議論へと通じている。よく知られているように、生活世界はフッサール、ハイデガー、メルロ・ポンティの現象学における中心的な論題である。生活世界とは、そこで我々が日常的な生を営む世界であり、そのようなものとして意味の構造を持った世界である。生活世界の構造を探究することによって、フッサールは生活世界の存在論と超越論的現象学を展開した。前者は自然的態度における生活世界の本質的構造を明確化することを、そして後者は超越論的現象学的態度における生活世界の本質的構成的構造を明確化することを試みるものである。これら生活世界の存在論と超越論的現象学は相互に密接に関連した形相的な学問分野である。我々はそれらに基づいて、生活世界の事実的構造を明確化することを目指す多様な事実的現象学的分野——現象学的考古学、現象学的建築学、現象学的地理学、現象学的環境学——を発展させることができるであろう。

(二) フッサールは一九一五年以降に発生的現象学を展開した。発生的現象学の目的は超越論的発生の構造を明確化することである。発生的現象学は、発生の問題に関連した諸問題を明確化することを目的とする様々な質的研究の発展にとつて、明白な重要性を持っている。例えば、発生的現象学的研究の成果はA・ギデンズ(1984)の社会構築主義に関する議論にとつて非常に重要であろう。ペイリーは、ハイデガーの現象学とは対照的に、フッサールの現象学はギデンズの社会構築主義とは関連を持たないと主張する [J. Paley (1988), 822]。

しかしながら、私の見解ではペイリーのこの主張は正しくない。なぜなら、ハイデガーの解釈学的現象学と同様に、フッサールの発生的現象学は社会構築主義とよく調和しうるからである。フッサールの発生的現象学とギデンズの社会構築主義との関連は、現象学的質的研究に関する将来の議論においてさらに詳細に論じられねばならない。さらに発生的現象学は、発達心理学、教育、看護、歴史学、考古学といった発生の問題に関連する諸分野における現象学的質的研究に対して大いに役立つであろう。

■ 註

1 現象学の体系的統一に関して、『デカルト的省察』の一節では次のように述べられている。「体系的に完全に展開された超越論的現象学は、それ自身として真正で純正な普遍的存在論となるだろう。だがそれは、空虚な形式的な普遍的存在論であるのみならず、あらゆる領域的な存在可能性をそれ自身のうちに、それらに属するあらゆる相関関係に应じて含むところの存在論である。こうした普遍的具体的存在論は、……したがって絶対的基礎付けを持つ、それ自体で最初の学問の全体であろう。……次にこのアプリアリな学問全体が、純正な事実的諸学や、デカルト的な意味での純正な普遍的哲学——絶対的基礎付けを有する、事実的存在者についての普遍的学問——のための基礎となるだろう。」[E. Husserl (1999), 155]

2 こうした事例には実にしばしば出会うので、個々に言及する必要がないほどである。

3 こうした文脈においてヴァン・マーネンは次のように述べている。「現象学的な知は経験的であり、経験に基づいている。しかし、それは帰納的に経験から導き出されるわけではない。このことは、現象学の関心が「単なる」特殊性の範囲に留まらないということを意味している。例えば、事例研究と民族誌学は非常に適切にある特定の状況、集団、文化、制度的な場に着眼し、そこで何が生じているのか、その集団における個人あるいは成員がいかに事物を捉えるか、そしてそれらが他のそのような集団あるいは状況と時間的・空間的にどの程度異なっているのか

- を研究する。そうした研究は、人々に自身の体験について語ることを求めるという点では現象学的な性質を持つかもしれない。しかし、事例研究や民族誌学の目的は、実在する事態や特定の現在あるいは過去の文化について正確に記述することである。そして、こうした事態や文化は、時と場所が変われば激変するかもしれない。したがって、「ウエストサイド高校の現象学」、「シンターバーのチャイナタウンの現象学」、「トロント小児病院の現象学」等といった言葉は誤称である。】[M. van Manen (1990), 22]
- 4 例えに、P・ロライジヤ (1978) 'P・ムナー (1984) を参照。
 - 5 こうした見解はP・ロライジヤ (1978) 'P・ムナー (1984) によつて示され、J・ペイリー (1998) 'C・B・ドラッカー (1999) と同じく研究者たちが同じく容認されている。

■ 参考文献

- P. Benner (1984), *From Novice to Expert: Excellence and Power in Clinical Nursing Practice*, Menlo Park: Addison-Wesley.
- P. Colaizzi (1978), "Psychological Research as the Phenomenologist Views It," in: R. Valle and M. King (eds.), *Existential-Phenomenological Alternatives for Psychology*, New York: Oxford University Press.
- J. W. Creswell (1998), *Qualitative Inquiry and Research Design: Choosing among Five Traditions*, Thousand Oaks: Sage.
- M. Crotty (1996), *Phenomenology and Nursing Research*, Melbourne: Churchill Livingstone.
- C. B. Draucker (1999), "The Critique of Heideggerian Hermeneutical Nursing Research," in: *Journal of Advanced Nursing* 30 (2).
- A. Giddens (1984), *The Constitution of Society*, Glasgow: Bell and Bain Limited.
- A. Giorgi (1970), *Psychology as a Human Science: A Phenomenologically Based Approach*, New York: Harper and Row.
- A. Giorgi (1985), *Phenomenology and Psychological Research*, Pittsburg: Duquesne University Press.
- E. Husserl (1941), "Phänomenologie und Anthropologie," in: *Philosophy and Phenomenological Research* III/1.
- E. Husserl (1950), *Die Idee der Phänomenologie*, Den Haag: Martinus Nijhoff.

- E. Husserl (1970), *Logical Investigations*, trans. J. N. Findlay, London: Routledge & Kegan Paul.
- E. Husserl (1973), *Experience and Judgment. Investigations in a Genealogy of Logic*, trans. J. S. Churchill/K. Ameriks, Evanston: Northwestern University Press.
- E. Husserl (1974), *Formale und transzendente Logik. Versuch einer Kritik der logischen Vernunft*, Den Haag: Martinus Nijhoff.
- E. Husserl (1982), *Ideas pertaining to A Pure Phenomenology and to A Phenomenological Philosophy. First Book: General Introduction to A Pure Phenomenology*, trans. F. Kersten, The Hague: Martinus Nijhoff.
- E. Husserl (1999), *Cartesian Meditations. An Introduction to Phenomenology*, trans. D. Cairns, The Hague: Martinus Nijhoff.
- E. Husserl (2002), *Einführung in die Philosophie. Vorlesungen 1922/23*, Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- N.-I. Lee (2004), *Transcendental Phenomenology and Hermeneutic Phenomenology*. E. Husserl's *Transcendental Phenomenology and M. Heidegger's Hermeneutic Phenomenology* (in Korean), Seoul: SNU Press.
- M. van Manen (1990), *Researching Lived Experience. Human Science for An Action Sensitive Pedagogy*, London: The Athlone Press.
- C. Moustakas (1994), *Phenomenological Research Methods*, Thousand Oaks: Sage.
- J. Paley (1997), "Husserl, Phenomenology and Nursing," in: *Journal of Advanced Nursing* 26.
- J. Paley (1998), "Misinterpretive Phenomenology: Heidegger, Ontology and Nursing Research," in: *Journal of Advanced Nursing* 27.
- A. van Kaam (1966), *Existential Foundations of Psychology*, Pittsburgh: Duquesne University Press.

■ 付記

本稿の韓国語版は、*Research in Philosophy and Phenomenology* 24 (2005) に採りて発表された。

(ナミン・リー ソウル大学教授)

(よしだ・あきら 東京大学大学院人文社会系研究科助教)